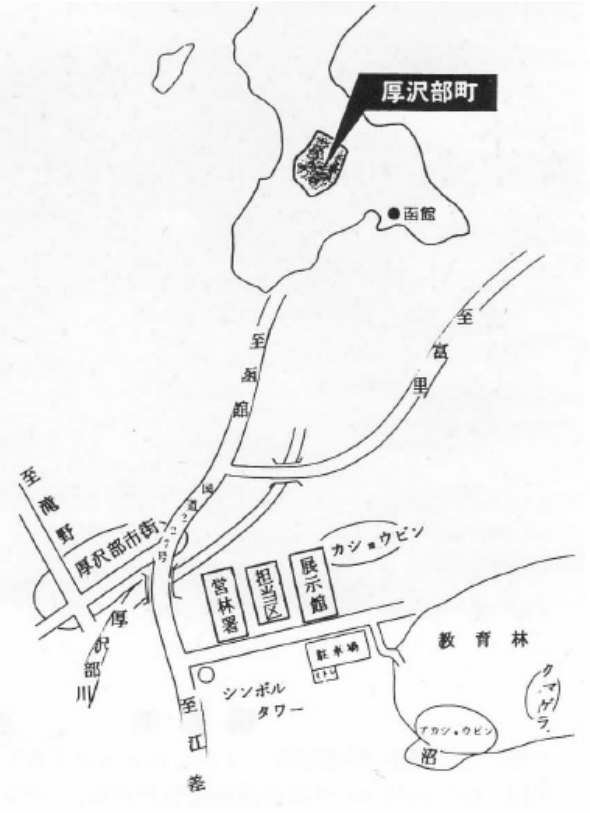
私の探鳥地（１４）（野鳥だより 79 号 1990 年 3 月）

厚沢部町土橋自然教育林

林　吉彦

国道 227 号線を函館から車で約 1 時間半、厚沢部川にかかる俄虫橋を渡ると右前方が大きく開ける。すぐに「つちはし自然教育林」の案内塔、ヒバ（ヒノキアスナロ）の丸太造りのシンボルタワーが左手に見えてくる。そこで国道を離れ、左に入ると総ヒバ造りの森林展示館前に出る。駐車場の奥には、やはり総ヒバの酒落た公衆トイレがある。森に入る前にちょっと立ち寄って……。ここにはバンガローもあるので寝袋を持っていけば、真夜中の、夜明け前の森と鳥たちに触れることもできる。この教育林は 113ba であるが、囲りの森を含めて 400ha が鳥獣保護区になっており、1 年を通じて多くの野鳥に会う事ができる。教育林の中には、いくつものルートが案内板つきで整備されているので安心して森に入ることができる。



厚沢部町つちはし自然教育林

この森の主人公は、クマゲラである。トドマツの南限といわれる森の中では老木に多くの食痕を見ることができる。また、ヒバ林の中は日照量が少なく、笹も非常に薄いので見通しが良いので、林床を歩くクマゲラに会えるかも知れない。

春から夏にかけての主役は、土地の人が南蛮鳥とよんでいるアカショウビンである。森の樹々が暗闇の中からシルエットを浮び上がらせると森のあちこちから声が響いてくる。とくに、エゾヤマザクラやカスミザクラの多い沼地周辺が発信地として目立つ。この近くではオオルリもよく目にする。ただ、森全体は針葉樹が多く、広葉樹も樹高が高いため、セソダイムシクイやイカル・カラ顕の声を聞く割には、ゆっくり姿を観察しにくいかも知れない。それでも、ヒナを連れたエゾライチョウが目の前を横切ったとすると、思わず歓声をあげた

くなる。

沢沿いには、トチノキ・サワグルミが多くヤブサメの絶好の住みかになっており、アオジの姿やコルリの声もする。とにかく、ここは樹齢 350 年を越えるブナ・ヒバも多く、原生林としての自然度を今なお保っておりアオハダなど鳥の大好きな実をつける樹も沢山あるので鳥種も豊かである。

木の葉の落ちる秋か冬にかけては、カラ類の混群、シマエナガ、キクイタダキが目につく。クマゲラ・アカゲラ・ヤマゲラ・コゲラもゆっくり姿を見せてくれる。

森林展示館の手前に桧山営林署厚沢部担当区事務所が。そこの主任の高橋氏は、森林学に造詣が深く、野鳥にも熱い想いを寄せているので、担当区に寄って、探鳥コースや植物について予備知識を仕入れていくと、楽しさも倍加するはずである。（雪の季節はかんじきもたのめば貸してもらえるはず）

時間があるなら教育林を出て滝野部落や富里部落方面に足を延して見ると良い。どちらも水田地帯だが、田植え時期ならアマサギ・ダイサギ・コサギを見ることができる。また厚沢部は渡り鳥の日本海側ルートになっていると思われ、雪解けのころから鳥の数が増え、ツグミ・カシラダカ・ホオジロの群れに会う事ができる。とくに富里地区には、水田近くの雑木林全体がカシラダカ・ホオジロの声に揺れる様である。秋には、ノゴマ・ノスリも大量に通過する。

ウオッチソグでの汗は、俄虫温泉か「館町いこいの家」の湯につかって流してはどうだろう。